



評伝 矢内原忠雄

関口安義 著



矢内原忠雄（やないはら・ただお 一八九三—一九六二）は新渡戸稲造・内村鑑三の薫陶を受け、無教会主義キリスト者として伝道に献身しつつ、実証を重んずる経済学者として、とりわけ帝国日本の植民地経営に対する批判的研究において第一級の業績を上げ、軍国主義と対決して野に退き、戦後は東大総長として再建日本の精神的指導に挺身した。本書は、その生涯を他の追隨を許さぬ綿密な調査と膨大な資料を基に描きあげた一一〇枚を越す評伝の決定版である。また詳細を極めた五〇頁に及ぶ索引は、さながら矢内原に関する小事典の趣を呈する労作。

◆A5判・函入・691頁・本体8000円

4月19日発売

▼関連書

柳生閑近著

日本のプロテスタントイズムの政治思想

無教会における国家と宗教

◆四六判・387頁・本体3800円

近代日本の国民国家形成期に「二つのJ」という困難な課題に立ち向かった内村・南原・矢内原・大塚という四人の無教会人の思想を辿る。

土肥昭夫著

◆A5判・528頁・本体4700円

天皇とキリスト 近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察

教界指導者、学校、ジャーナリズムなどの多様な側面から日本人キリスト者の天皇観と行動を明らかにする。このテーマを考える上で必読の文献。



橋をつくるために

現代世界の諸問題をめぐる対話

◆四六判・421頁・本体2600円

4月19日発売

教皇フランシスコ、ドミニック・ヴォルトン／戸口民也訳

戦争、貧困、環境破壊、難民、文化的アイデンティティと伝統、異なる者同士のコミュニケーション、そして教会のあり方等々のテーマをめぐり、フランスの著名な社会学者が一年間一二回にわたって教皇に行ったロングインタビュー。しかしここには、単なるインタビューに留まらぬ、真に対話の名に値する言葉のやり取りがあり、読む者はたちまち引き込まれるであろう。今秋に来日が噂される教皇。その思想をより深く理解するための絶好の書。

教皇フランシスコ 一九三六年、アルゼンチン生まれ。ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ。イエズス会士。二〇一一年枢機卿に就任。二〇一三年より第二六六代ローマ教皇。

ドミニック・ヴォルトン (Dominique Wolton) 一九四六年、カメルーン生まれのフランスの社会学者。国立科学研究センター (CNRS) のコミュニケーション・サイエンス部門長。多数の著書がある。

訳者 戸口民也 (とぐち・たみや) 一九四六年生まれ。早稲田大学大学院仏文科修士課程修了。長崎外国語短期大学、長崎外国語大学で、フランス語・フランス文学などを四〇年にわたって教えた。専攻はフランス一七世紀演劇。カトリック信徒。

「わたしたちの模範であるイエス・キリストにならって、橋を架けねばなりません。イエス・キリストは、父なる神から《Pontifex》——橋をつくる人——となるために遣わされました。わたしの考えでは、まさにそこに教会の政治活動の基本があります。」(教皇の言葉。本書より)

ミラ・ゾンターク編

〈グローバルヒストリー〉の中のキリスト教

近代アジアの出版メディアとネットワーク形成 大陸をまたぐネットワークと多極構造を反映する新たなキリスト教史の構築を目指す「ミューン学派」。主導するコンソルケ氏ら八名の論者が、近代東アジアにおける活字メディアに着目した意欲的共同研究。

◆A5判・予価3700円

ヴィクトール・フランクル著／赤坂桃子訳

夜と霧の明ける時

未発表書簡、草稿、講演（仮題）

強制収容所からの解放と帰郷という、フランクルの人生において最も重要な時期の伝記的な事実と、当時の中心思想の端を、未公開書簡と文書を用いて再構成する。名著誕生の背後にあった個人史と時代史の二つの文脈が初めて明確に交差する。

◆四六判・予価2900円

山下壮起著

ヒップホップ・レザレクション

ラップ・ミュージックとキリスト教 今や世界的大衆文化となったヒップホップ。その最初の担い手であったアフリカ系アメリカ人における宗教的機能を探り、ヒップホップと既存教会との関係や聖俗観・救済観を検討する。気鋭の神学者による注目作。

◆A5変型判・予価3200円

●3月に出版本と雑誌

統べるもの／叛くもの

新教出版社編集部編 統治とキリスト教の異同をめぐって 気鋭の論者による論考と白熱のトーク。佐々木裕子・堀江有里・要友紀子・白石嘉治・栗原康・五井健太郎。

◆四六判・本体2200円

カール・バルトとエキュメニズム

佐藤司郎著 一つなる教会への途

初期から晩年に至るエキュメニズム観の変遷をテキストの丹念な読解を通して辿り、教会と宣教に関するバルト神学の根本テーマを明らかにする。類書の乏しい分野における貴重な貢献。

◆A5判・本体3500円

ヤスパースとキリスト教

岡田聡著 二〇世紀ドイツ語圏のプロテスタント思想史において

ヤスパースとキリスト教の「近さ」と「遠さ」の機微を、ブルトマン、テイリツヒ、H・バルト、K・バルトラとの折衝を通して探る。

◆四六判・本体2500円

福音と世界

4月号 人類学とキリスト教

◆税込635円

寄稿者：佐藤壮広、前高西一馬、川橋範子、奥野克己、管啓次郎／堀江有里／マニエル・ヤン、石井光太、谷崎榴美、内田洋子、長谷川修一、山口政隆、芦名定道、内田樹、辻学、佐藤優

●もう先々月のことになりませんが、東京・水道橋にある在日本韓国YMCAで開催された二・八独立宣言一〇〇周年記念国際シンポジウムは、定員二〇〇名のホールが満席になるほどの大盛況でした。かつて朝鮮人留学生らが二・八独立宣言を発表する舞台となった同YMCAを会場に、その宣言の意義を現在の視点から受け止めつつ、日・韓・在日社会の今後の課題を探ろうというこの会の重要性はいくまでもありません。とはいえ、取材者として訪れたわたし自身は、そこまでの来場者があるとは予想していませんでした。歴史の再考をつうじて、現在を批判的に捉えなおそうという思いをもったひとがこれだけいるのだと、あらためて気づかされました。

●いま小社では、このシンポジウムの成果を書籍化するべく関係者の方々と協力しながら企画を進めています。書籍には、東京そして大阪で開催されたシンポジウムの記録、さらにはシンポジウムにいたるまでの年間にもたれた連続講座の内容も収録される見通しです。発行予定日は、今年の八月二十五日。あまり時間はありませんが、編集に励みたいと思います。(堀)

●今月は二点の新刊準備に追われました。

『評伝矢内原忠雄』は既に手が離れて本の出来上がりを待つのみですが、教皇フランシスコの『橋をつくるために』は最後の装丁の段階です。書名の「橋をつくる」とは本書のキーワードで、疎遠なものや敵対的なものを結びつけ、平和の交わりを創造すること。「橋」の上には出会いがあり、驚きがあり、そこから新しい物語が生まれてくるはずです。そんな嬉しい驚きと新しい物語を予感させる装丁にしたいと願い、教皇の、ちよつと変わったコミカルな表情の写真を選びました。どんなカバーになるか乞うご期待。

●キリスト教専門書店の店員さんたちが選ぶ「キリスト教書店大賞」、今年の第一次投票が終わり、小社の『わたしの信仰』（メルケル）が第二位にノミネートされました。上位一〇点で第二次投票が行われ、九月に大賞が決定します。

●五月から「令和」とか。元号が好きなたまらない方や、天皇家をどうしても残したい方は、有志で保存協会でも作り、カレンダーを印刷したり、あのご一家を維持したりする基金を作り、自分たちの趣味としてやってほしいと思います。この国にそういう下位文化が存在することは構いませんので。(小林)

福音と世界

2019年
5

特集.. 老いをいかに生きるか

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料(送料共) 8460円

「老い」を生きるための黙想—— 関田寛雄

「トバ」は老いたる日々杖—— 横田幸子

老いと教会—— 私に与えられたいくつもの大切な気づき—— 中村正俊

立ち現れる新たなエイジズム—— ポスト経済成長時代の超高齢社会／人口減少社会において—— 天田城介

ゲイたちの老後—— 永易至文

《今月のこの1作》『ある少年の告白』.....編集部

【好評連載】

◆バビロンの路上で2.....マニエル・ヤン

◆神の酒2.....石井光太

◆新約釈義 テトス書2.....辻 学

◆福音書記者の饗宴5.....松本あずさ

◆遺跡が語る聖書の世界8.....長谷川修一

◆わたしは口ツクがわからない8.....山口政隆

◆福音の地下水脈19.....谷崎榴美

◆現代神学の冒険32(最終回).....芦名定道

◆聖書とわたし38.....松居直美

◆レヴィナスの時間論49.....内田 樹

◆ことばの履歴書62.....佐藤 優